

皆さん、こんにちは。私は高田珠美と申します。普段は弁理士として働いています。弁理士という職業については、ご存じない方も多いため、簡単に説明いたしますね。弁理士というのは特許や商標等の知的財産に関する国家資格を持った専門家です。私は、弁理士として特許を取得したいというクライアントのために、特許庁に対して特許出願等の手続きを代理することを、主な仕事としています。特許庁とか手続きの代理等といった説明からイメージされるとおりで、いわゆるお堅い仕事ということになるかと思えます。

そして、私はその仕事の傍ら職業としてではなく、趣味で演劇、芝居をやっています。いわゆるアマチュア演劇なのですが、アマチュアとはいっても観客の期待に応える内容のお芝居を届ける、という使命はプロの俳優さん達がやる演劇と、何も変わることはありません。

皆さんはお芝居をやったことはありますか。学校の文化祭等での経験が最後でしょうか。人前でお芝居をやるなんて、とんでもないという方もいらっしゃるかも知れませんね。また、自分ではお芝居をやるということはないんだけど、見るのが好きだとか、たまには見に行くこともあるという方はいらっしゃいますよね。それからテレビドラマをよく見るという方はたくさんいらっしゃると思います。テレビドラマは生の舞台ではありませんが、俳優さんの演技によって成り立つものですよね。今日は私が演劇を始めたきっかけ、また続けるきっかけとなったことについてと演劇の魅力をお話します。

私の記憶の中で、1番古いお芝居の記憶は幼稚園の年長の時のクリスマス会で、クラスごとの出し物として浦島太郎の劇をやったことです。私の役は、浜辺で亀をいじめる子供でした。そんな役よりも例えば乙姫様だったり、そうでなくても鯛やヒラメになって舞い踊ったりする方が楽しそうだなあと子供心にちょっとがっかりして、お芝居もうまくできずにいました。

そんな私に担任の先生が声をかけてくれました。お話に出てくる人にはそれぞれいろんな役割があって、亀をかわいそうに思って浦島太郎が亀を助けに来るのだから、そういうお話を見る人が楽しめるように、亀をいじめる様子をやるんだよ、といったような内容でした。

私はその先生が大好きだったので、優しく声をかけてくれたのが嬉しくて、本番では亀役の子が背負った甲羅に足をかけて、エイエイとカメをいじめる様子を、一生懸命やりました。

クリスマス会の会場は岐阜市民会館のホールだったのですが、きっと私は悪たらしく亀

パソコン第2問 高田珠美

をいじめていたのでしょうね。会場がどっと沸いたのを覚えています。また、私がステージに登場したら、客席からお姉ちゃんだと私の妹が大きな声で喜ぶのが聞こえたことも覚えています。舞台に出るだけで喜んでくれる人がいるんだなあ、喜んでもらえると嬉しいなあという原体験となった出来事でした。クリスマス会の劇はとっても楽しかったのですが、その後の私は習い事のピアノと書道に熱中し、演劇には縁がありませんでした。

ずいぶん経って中学3年生の時、文化祭でクラスで劇をやることになりました。題材は「お母さんの木」というお話でした。まあクラスみんなは、多感な中学生ということもあってか、本当はもっと楽しいお話の劇をやりたいだとか、自分よりも年齢がずっと上のお母さんを演じるということに戸惑いがあったためか、配役を決める学級会では肝心の主役のお母さんがちっとも決まりませんでした。それなら、と思いついて私がやっても良い？と言ってみたところ、私がお母さん役をやることに、すんなり決まりました。